

Title	中古王朝物語の会話文 : 地の文との境界をめぐって
Author(s)	黒木, 邦彦; 藤本, 真理子; 清田, 朗裕 他
Citation	詞林. 2008, 43, p. 1-7
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67577
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

中古王朝物語の會話文

——地の文との境界をめぐって——

一 はじめに

〔阪倉（一九五九）によれば、中古王朝物語（以下、「物語」と略記）の會話文は、次のような形式によって標示されることがあるという。これらの目印があれば、會話文の識別は容易である。

十八世紀以前のヨーロッパ文においてもそうであったように、會話文を表示する引用符は、物語の文章などには、もちろん、まだ發達してはいない。しかし、これにかわるものとして、この種の文章には、

いはく……といふ。いふやう……といふ。いひけるは……といふ。いはく……と。いはく……とて、いふやう……とて、いふ……とて、いはく……と。いふやう……とて、いふ……とて、いはく……と。いふやう……とて、いふ……とあり。

というような語句が、會話文「・・」の前後、または前なし後におかれることが多い。（これらの伝達動詞は、また「語る」「申す」「奏す」「きこゆ」「宣ふ」「告

黒木 邦彦・藤本真理子
清田 朗裕・森 勇太

ぐ」「問ふ」「答ふ」などにおきかえられる場合のあること、もちろんである）。後述のごとく間接話法的なものととの區別、ないしは、実際の發話にいたらずして、単に心中のおもいをあらわすにすぎない「心話」というべきものとの區別には、微妙な問題がないわけではないが、一往これらを目じるしにして會話文をひろい出すことは可能である。

（阪倉一九五九、一九六頁）

通達動詞に由来し、會話文の始まりを標示する、「言はく」や「言ふやう」といった形式（以下「通達名詞」）は、九世紀末から一〇世紀初頭にかけての成立とされる、『竹取物語』に多く見られる。

（一） かぐや姫の言はく、「よくもあらぬかたちを、深き心も知らで「・・」。世のかしこき人なりとも、深き心ざしを知らでは、あひがたしとなむ思ふ」と言ふ。

（竹取、二二頁）

（二） 翁、皇子に申すやう、「いかなるところにか、この木はさぶらひけむ。あやしく、うるはしく、めでた

き物にも」と申す。

(竹取、三二頁)

二 問題の所在

しかし、『竹取物語』を離れると、通達名詞がむしろ希有な存在であることに気づく。一〇世紀後半の成立とされる『落窪物語』からは、少量ながらも、

(三) 右大臣のたまはく、「子の生まれたるに、祖父、父、よろこびをする、かしこき子なり」と申したまふ。

(落窪、巻二、一七三頁)

(四) わらはなる子の言ふやう、「全て上の悪しくしたまへるぞ。何しに部屋に籠めたまひて、かくをこなるものに逢はせんとしたまひしぞ。」「・・・」いみじき事なりや」とおよすげ言へば「・・・」

(落窪、巻二、二二〇頁)

のような例を拾い出すことができる。しかし、一一世紀以降の作品ともなると、こうした例は、全くと言ってよいほど見られなくなる。

『竹取物語』などを除けば(前述のとおり、とりわけ、一一世紀以降においては)、物語の会話文は、地の文との境界が曖昧である(阪倉一九五九、同一九七五、池田二〇〇二参照)。そのため、『岷江入楚』のような中世の注釈書においては、会話文と地の文を区別するため、

(五) いづくにおはしますそ 弄うつせみの詞云々 此

義非也

小君は源の御前よりかへりてうつせみにいづくにおはしますそとふ声也

こゝにそふしたる 花小君かいらへ也 是又非也

弄の義と同じ 是はうつせみの返答 まらうと

はね給ぬるかと源の事を御前よりかへりたれば

小君にとふ詞也(岷江入楚、二、帚木、一八七頁)

のような作業がおこなわれている。読解の精度を上げるため、当時からすでに、会話文と地の文を区別する必要があったと考えられる。

以上のように、物語同士の間でも、会話文の前後の形式は一樣ではない。このことは、会話文と地の文の境界が明瞭であるか否かに直結している。本稿では、会話文の前後の形式に注目し、地の文との境界について考察する。

なお、時間的な問題から、対象は、『竹取物語』『落窪物語』『源氏物語』『とりかへばや物語』(以下、『竹取』『落窪』『源氏』『とりかへ』と略記)に限定する(この四つは、推定成立年代をもとに選んだ。その他の作品を含めた包括的な考察は、別稿においておこなう予定である)。

三 会話文の前

三・一 通達名詞・動詞

前述のとおり、会話文の始まりを標示する通達名詞は、『竹取』に特徴的なものである。『竹取』には一九三例の会話文があるが、その三〇%弱にあたる五七例が通達名詞をとる。次に例を挙げる(前掲(一)(二)も参照)。

(六) かぐや姫答へて言はく、「もはら、さやうの宮仕へ
しまつらじと思ふを、「・・・」。御官かうぶり仕う
まつりて、死ぬばかりなり。」 (竹取、五九頁)

(七) 翁の言ふやう、「御迎へに来む人をば、長き爪して、
眼を掴み潰さむ。さが髪をとりて、かなぐり落とさ
む。さが尻を掻き出でて、ここのの朝廷人に見せて、
恥を見せむ」と腹立ちをり。 (竹取、六九頁)

今回調査したところによれば、『落窪』『源氏』『とりかへ』
のいずれにおいても、通達名詞の割合が二%を超えることは
ない。具体的には次のようである。

(八) 通達名 会話文

竹取	五七／一九三 (三〇%弱)
落窪	一一／七七四 (一%強)
源氏	一／七〇九 (一%弱)
とりかへ	〇／二四四 (〇%)

また、『竹取』は、会話文の前に、「言ふ」などの通達動詞

が現れるか否かによっても区別される。

(九) 通達動 会話文

竹取	一六／一九三 (八%強)
落窪	二／七七四 (一%弱)
源氏	三／七〇九 (一%弱)
とりかへ	一／二四四 (一%弱)

通達名詞に比べると差は小さいものの、(九)は、(八)と平
行的にとらえることができる。

三・二 通達名詞・動詞の主語(会話文の話し手)

興味深いのは、会話文の前に通達名詞・動詞があると、大
抵その主語(会話文の話し手)が明示されるということであ
る。その場合、基本語順に従って、主語が通達名詞・動詞に
先行する。³⁾

- (一〇) 翁|答ふ、「定かに作らせたものと聞きつれば、返
さむこといと易し」とうなづきををり。(竹取、六六頁)
- (一一) 明けぬれば、帯刀に衛門が言ふ、「しかじかのこと
あるべかなるを、心憂くも言はぬにこそ。遂に隠れ
あるべきことかは」と言ひければ「・・・」
(落窪、卷二、一六三)

会話文の前の通達名詞・動詞に、その主語が先行する割合
は、次のとおりである。

(二二) 主語先 通達

竹取 六四 / 七三 (八八%弱)
 落窪 八 / 一三 (六二%弱)
 源氏 〇 / 四 (〇%)
 とりかへ 〇 / 一 (〇%)

このように、通達名詞・動詞の有無と、主語の有無、およびその位置の間には、相関関係が認められるのである。

三・三 文成分なし

先ほどまでとは違って変わって、会話文の前に、通達名詞・動詞や主語はおろか、副詞などの修飾語すらとらない例も珍しくない(むしろ、こちらの方が多数派)。たとえば、次のようである(「φ」は文成分がないことを示す)。

(二二) φ「入々」「親、君と申すとも、かくつきなきことを仰せたまふこと」と、事行かぬものゆゑ、大納言を誘り合ひたり。φ「大納言」「かくや姫据ゑむには、例のやうには見にくし」とのたまひて、うるはしき屋を造りたまひて「・・・」 (竹取、四四頁)

(二四) φ「左大臣」「思し捨つまじき人もとまりたまへれば「・・・」など慰めはべるを「・・・」さりとも遂にはとあいな頼めしはべりつるを、げにこそ心細き夕べにはべれ」とても泣きたまひぬ。φ「源氏」「いと浅はかなる人々の歎きにもはべるなるかな。

「・・・」今御覧じてむ」とて出でたまふを、大臣見送りきこえたまひて「・・・」 (源氏、葵、二、六四頁)

(二五)

「尚侍が」といみじく清らにて問はせたまふに、「使いは」とかたじけなくなりて、「宇治のわたりにおはしますとぞ承る」と。φ「尚侍」「宇治のいづくのほどぞ」。φ「使は」「式部卿の宮の御領とぞ承りし」と申せば「・・・」(とりかへ、巻三、二五〇頁)

次のように、会話文の前に文成分がない例は、『竹取』以外の作品に多い。この点で、三・一節、三・二節において確認した、通達名詞などの量的分布とは対照的である。

(二六)

竹取 三一 / 一九三 (一六%強)
 落窪 三五〇 / 七七四 (四五%強)
 源氏 四二四 / 七〇九 (六〇%弱)
 とりかへ 七九 / 二四四 (三二%強)

成分無 会話文

四 会話文の後

四・一 動詞の主語(会話文の話し手)

三・二節で見たように、『竹取』においては、多くの場合、会話文の前の通達名詞・動詞に、その主語が先行する。同様のことを会話文の後で調査したところ、次のような結果が得られた。

(一七) 主語先 動詞^①

竹取	一〇/一五五 (一%弱)
落窪	六/五六四 (一%強)
源氏	一六/五四五 (三%弱)
とりかへ	二/一九〇 (一%強)

いずれも三%を下回っており、これだけでは、有意差の有無が判断しがたい。

四・二 引用標識と動詞の接続

続いて、会話文の引用標識と動詞の接続関係を見る。次のように、「と」や「など」といった引用標識と動詞の間に、補語や修飾語が入ることがままある。

(一八) 「少将」「これ参れ」と女君に参りたまへど、恥ぢて参らず。
(落窪、巻一、五〇頁)

(一九) 「式部丞」「さて、いと久しく罷らざりしに」「・・・」

さすがに口疾くなどは侍りき」としづしづと申せば
(源氏、帚木、一、八八頁)

(二〇) 「大将」「げにさること」と心やすくうち言ひながら
(「・・・」) (とりかへ、巻三、二四七頁)

(二一) 「・・・」(二〇) のような例は、『源氏』と『とりかへ』に多く見られる。具体的な数値を次に示す。

(二二) 非直接 動詞

竹取	一〇/一五五 (六%強)
落窪	五〇/五六四 (九%弱)
源氏	八五/五四五 (一六%弱)
とりかへ	三八/一九〇 (二〇%)

(一七) と (二二) を併せると、主語、補語、修飾語などを有する文(実際の統語範疇は節)が、会話文の後にどの程度現れるかがわかる。三節の調査結果を踏まえると、『竹取』においては、会話文の前に、主語や補語を有する文が多く現れる。『源氏』などはその反対で、そうした文はむしろ、会話文の後に多い。

五 会話文と地の文の境界

前述のとおり、『竹取』においては、主語、補語、修飾語などを有する文が、会話文の前に現れる。文としての体をなしているのは、会話文の前の方であり、後の方は簡素である。

(二二) 帝聞こし召して、内侍中臣のふさ子にのたまふ、
「多くの人の身をいたづらになして逢はざるるかぐや姫は、いかばかりの女ぞ」と、罷りて見て参れ」
(竹取、五六頁)

(二三) 一人の男、文挟みに文を挟みて申す、「内匠の工匠、あやべの内麻呂申さく」「・・・」。これを賜ひて、悪き家子に賜はせむ」と言ひて捧げたり。

(竹取、三四頁)

(二二)(二三)からわかるように、『竹取』の地の文は、大抵会話文の前で完結している。会話文も、文末の述語が終止法の形(終止形や、係助詞に呼応した連体形、已然形)をとったり、終助詞を接続させたりするので、地の文との境界が明確である。

一方、『源氏』などは、地の文が会話文を包むような構造になっている。たとえば、次のようである。

(二四) 君はおこなひしたまひつつ、日たくるままに、いかならんと思したるを、〔俱△〕とかう紛らはさせたまひて、思し入るれぬなんよくはべる」と聞こゆれば、背後の山に立ち出でえ京の方を見たまふ。はるかに霞みわたりて、四方の梢そこはかとなうけぶりわたれるほど、〔源氏〕絵にいとよくも似たるかな。かかる所に住む人、心に思ひ残すことはあらじかし」とのたまへば「〔源氏、若紫、一、二〇二頁〕『新編日本古典文学全集』(小学館)の頭注によれば、「絵に似たるかな」を地の文とする説や、「はるかに霞みわたりて…」以下を源氏の発話とする説などがあるという。地の文から会話文への移行が滑らかなため、明確な境界を引くのは困難である。

以上のことを図にまとめると、次のようになる。

(二五) 「地の文」 「会話文」 「地の文」 …

(二二)(二三)(二四)

(二六) 「地の文」 「会話文」 「地の文」 … (二四) 本稿では、会話文の前後の形式に注目し、物語同士の間でも、地の文との境界が、右のように異なることを指摘した。

注

(1) この時代、ク語法はすでに生産性を失っているため、「言はく」などの例は求めるべくもない。ただし、同様の表現は、「言ふやう」や準体節(「主語が/の+通達動詞連体形」(例)内侍のたまふ)で代用可能であるから、ク語法の衰微は、このことには関係しない。

(2) 調査範囲は次のとおり。『竹取』を除けば、いずれも全巻調査ではないが、これが原因で、本稿の主張が覆ることはないと考えらる。

『落窪』…卷一、二

『源氏』…桐壺卷、葵卷

『とりかへ』…卷三、四

(3) 「通達名詞の主語」というのは、誤解を生みかねない表現であるが、おおよそ、従属節中の主語に相当すると考えてよい。したがって、(二)(四)(七)(一一)のように、属格助詞「が」「の」が標示されることもある。

(4) 会話文を承けるのは、必ずしも通達動詞に限らないので「…と泣く」「…と恥ぢらふ」など、対象を動詞一般に広げた。

【資料】

『竹取物語』（九世紀末～一〇世紀初）

『新編日本古典文学全集12 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』、小学館、片桐洋一（校訂）、底本Ⅱ古活字十行甲本

『落窪物語』（一〇世紀後）

『新日本古典文学大系18 落窪物語 住吉物語』、岩波書店、一九八九、藤井貞和・稲賀敬一（校訂）、底本Ⅱ九条家本

『源氏物語』（一一世紀初）

『新編日本古典文学全集20』25 源氏物語』、小学館、一九九四～九八、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男（校訂）、底本Ⅱ伝明融筆臨模本・大島本・伝定家筆本

『とりかへばや物語』（一二世紀末？）

『新日本古典文学大系26 堤中納言物語 とりかへばや物語』、岩波書店、一九九二、今井源衛・森下純昭・辛島正雄（校訂）、底本Ⅱ陽明文庫本

『岷江入楚』（一五九八）

『岷江入楚 自一桐壺至十一花散里』、武威野書院、一九八四、中野幸一（編）、底本Ⅱ国会図書館蔵本（寛永二〇年飛鳥井雅章筆本、旧三条西家蔵本）

【参考文献】

池田和臣（二〇〇二）「源氏物語の文体形成―仮名消息と仮名文の表記―」、『国語と国文学』七九・二、一～一七頁、東京大学

井島正博（二〇〇五）「中古和文の地の文と会話文」、『築島裕博

士傘寿記念 国語学論集』、一三三〇～四六頁、汲古書院

加藤昌嘉（二〇〇六）「と」の気脈―平安和文における、発語／地／心内の境―、『詞林』四〇、一四～二八頁、大阪大学古代中世文学研究会

（二〇〇七）「句読を切る。本文を改める。」、伊井春樹（監修）・加藤昌嘉（編）『講座源氏物語研究8 源氏物語のことばと表現』、二二六～五〇頁、おうふう

阪倉篤義（一九五九）「物語の文章―会話文による考察」、『人文』六、京都大学「再録」：阪倉（一九七五）、六六～八四頁

（一九七五）『文章と表現』、角川書店

三谷邦明・東原伸明（編）（一九九二）『日本文学研究資料新集5 源氏物語 語りと表現』、有精堂出版

宮坂和江（一九五五）「会話文と地の文」、『国文学 解釈と鑑賞』二〇・六、一四～一七頁、至文堂

（くろき・くにひこ 本学大学院博士後期課程）

（ふじもと・まりこ 本学大学院博士後期課程）

（きよた・あきひろ 本学大学院博士後期課程）

（もり・ゆうた 本学大学院博士前期課程）